
ハリー・ポッターと銀色の侍達

御幡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリー・ポッターと銀色の侍達

【Nコード】

N6778S

【作者名】

御幡

【あらすじ】

ふくろうが届けるのは万事屋への依頼の手紙。

届け主は魔法魔術学校の校長で？

ホグワーツでのドタバタ騒動が始まる予感！

第1章 暑い夏の日には家でコロコロすんのが一番 (前書き)

はじめまして、御幡です。

今回が初作品ですので、ところどころ意味不明だったりするかもしれませんが

生温かい目で読んでくださったら光栄です。

第1章 暑い夏の日には家でコロコロすんのが一番

フクロウが運んでくるのは1通の手紙

羊皮紙に書かれた文字はこれからの運命を左右することになる

届け先は江戸のかぶき町

万事屋銀ちゃん

「書」

「暑いアル」

「暑いですね」

呟いたのはご存じ（ご存じじゃないかもしれないが）万事屋トリオである。

1 番目が万事屋オーナー 坂田銀時。

2 番目は大食い怪力少女 神楽。

そしてラストが地味なツツコミ要員 志村新八。

何故この3人が同じような事を吐き捨てたのかというと

暑いからである。

説明が足りない？
では言い直そう。

季節が夏だからである。

カレンダーでは8月中旬を表している。

太陽サンサン、まさにそのとおりなわけで。

「40」

新八が呟いた。

「何アルか…その数値は」

神楽が扇風機を独占しながら聞いた。

「今日の最高気温だよ、神楽ちゃん」

「ただでさえ暑いのにそんな暑苦しい数字言わないでくんない？
だからてめえは新八なんだよダメガネ」

「新八の存在全否定しないでくれませんか銀さん」

「暑いアル。ダメガネのせいで余計暑くなったヨ。」

マジ何アルか、喧嘩売ってんのか」

「神楽ちゃん、標準語になってる」

ツッコミが存在意義のほつぱつあんでさえこのツッコミ。
それくらい暑いということだ。

万事屋は今、蒸し風呂状態。

どこかの漫画家がチーズ蒸しパンになりたいとか言っていたらしい
が、

万事屋トリオはマジに蒸しパンになるんじゃないかと思っているく
らい暑いのだ。

正直、いや、正直じゃなくてもいいのだが、動く気が全くしないの
が万事屋の現状。

こんな時に依頼を持ってきた奴とりあえずクーラー買わす、
なんてことをちゃっかり思っていたりするのも万事屋の現状なわけで。

ピンポーン…

万事屋に鳴り響くありきたりなチャイム音。

今ほど現実逃避したいと思ったことは過去数回。
まあそういうことは置いといて、とにかくだ。

3人の目の下の影が濃くなったのは言っまでもないことだろう…。

第1章 暑い夏の日には家でコロコロするのが一番 (後書き)

読んでくださってありがとうございます。

次回はふくろう便が万事屋に届きます。

よろしければまた読んでください。

第2章 幸せを運んでくるのは青い鳥、じゃあ厄介事を運んでくるのは？

万事屋に鳴り響くありきたりなチャイム音。

3人の顔の影が一気に濃くなる。

そして同じことを心の中で願う。

帰れHHHHHHHHHHHHHHHHHHHH!!

ただでさえ何もしくとも流れる汗の量が倍になる。
そりゃもう滝のようだ。

新八はうちわを仰ぐ手を止め、
神楽は扇風機を追うのをやめた。

銀時はもともと何もしていなかったからそのままの状態でもkなのだが。

何分経っただろうか。

チャイムが鳴ってから全く動かない万事屋トリオはお互いに視線を合わす。

銀ちゃん、暑苦しいヨ。私もう限界ネ。扇風機追いかけたいアル。

神楽がアイコンタクトで銀時に訴える。

そうだな…ずっと動かないってのも意外に暑いし…いいんじゃないね？

銀時がアイコンタクトで返す。

「てゆうか、あんたらなんで普通にアイコンタクトで会話出来てん

ですか？

もうそれアイコンタクトじゃなくてテレパシーになってますよ」

新八のツツコミが入る。

勿論声を発して。

「おまつ…台無しだろーがアアアアアー！！」

「何さらしてくれとんのじゃアアアアアー！！」

「ぼげらあー！！」

突如飛んできた2つの飛び蹴り。

新八は盛大に鼻血を噴き出しつつソファーを飛び越え床に着地！
（というか激突）

「ななななな、何すんですか2人ともオオオオオー！！」

新八が鼻を押さえつつ叫ぶ。

「何って、空気をぶち壊した奴にお仕置きをだな…」

「僕今空気壊したんですか！？」

「壊したアル。せつかくアイコンタクト会話してたのに
お前が声出すから意味なくなっちゃったヨ」

「そんな理由で！？」

と、その時だった。

暑いからと全開にしていた窓から

何かが侵入してきた。

その侵入してきた物体は倒れこんでいた新八の上を通り、

銀時の顔面にクリーンヒットした！

「……お母さん」

「何アルか!？」

銀時は勢い余ってソファーに倒れこんだ。

あまりにも突然すぎることに新八と神楽は啞然呆然とするばかり。

銀時の顔面に向かっていった物体はよく見ると

このかぶき町では滅多に、
とつか絶対に見ないはずの生き物。

茶色いフクロウだった。

第3章 異国っぽい手紙はデレション上がる気がする

ふくろうは羽根を撒き散らしながら銀時の顔の上から飛びのいた。

「大丈夫ですか！？銀さん！」

新八が銀時に駆け寄る。

神楽はといつと…

「大丈夫アルか！？定春42号オオオ！」

ふくろうに駆け寄っていた。

「神楽ちゅわーん！？違うよね！？駆け寄る相手間違ってるよね！？
銀さん泣いちゃうよ！？泣いちゃっていいの！？？」

24

銀時が即シャウト。

「大丈夫アルよ！そのツツコミの速さならすぐ回復出来るネ」

「てゆうーか神楽ちゃん、その鳥定春42号じゃないよ。
名前全然違うから」

「じゃあなんていう名前アルか？」

「ふくろうつていうんだよ、神楽ちゃん」

「知ったかぶりかヨ、ダメガネ」

「神楽ちゃんが教えろっていうから教えたんでしょうが!!
なんでそう言われなきゃなんないの!？」

「ちよ、もういいだろ2人とも。」

「どうやらこいつぁお手紙配達しにきたらしいぜ」

銀時が取っ組み合いを始めた新八と神楽を止め、
ふくろうつを優しく抱えた。

ふくろうつは大人しく銀時の腕に収まっている。

「あ、本当だ。手紙が落ちてますよ」

新八が落ちていた手紙を拾い、銀時に渡した。

手紙は少し黄色く、厚かった。

まるで違う国からの手紙みたいなの…。

第3章 異国っぽい手紙はデレンション上がる気がする(後書き)

中途半端に終わってしまいました。
すみません。

第4章 届いたものの送り主が知らない人だと疑問が泉の如く湧きあがって

更新1〜2日に1章です。

第4章

届いたものの送り主が知らない人だと疑問が泉の如く湧きあがってく

落ちていた一つの手紙は異国からの届け物。

銀時達は疑いの眼差しで新八の手にある手紙を睨みつけた。

「銀さん、開けていいんでしょうかね、この手紙…」

新八が銀時に聞く。

銀時は相変わらず茶色いふくろつを抱えたまま黙りこむ。

「銀ちゃん、この手紙随分と厚みがあるネ。もしかしたらもしかするかもしれないヨ」

神楽が新八から手紙をひったくって手紙の厚さを確認する。

「怪しさ120%なんですけど」

「まずは開けてみるアル！話し合いはそのあとネ！」

そう言って神楽は手紙の封を破る。

「そーいちゃんぽっしょん」

と、ここにきてやっと口を開いた銀時。

新八は「なんですか?」と言って銀時の方に顔を向ける。

「送り主、なんて書いてあったよ? ついでにどんな感じで書いてあった?」

突然話しかけてきたかと思っただけの質問。

新八は「あ?」という反応。

「だから、送り主なんて?」

「そつえば見てませんでした」

「おいおい、見るだろフツ。だからお前はダメガネなんだろうが」

「アンタ喧嘩売るために僕を呼んだんですか」

新八の額に自然と血管が浮かぶ。

銀時はそんな新八の様子を華麗にスルーして話を続ける。

「いやよあ、今時鳥を使って手紙配達たあ常人のするようなことじやねーだろ」

「まあ、確かに…」

「てことはだよ、新八君。こいつあマジで異国からの依頼かもしんねえ。」

とりあえずぱっぱと終わらせて報酬もらったらエアコン買いに行けるかもしんねーんだぞ。

ここは依頼を受けてエアコンの為に働くのが賢明じゃねーのか？」

銀時が真顔で言う。

「銀ちゃん銀ちゃん」

と、すっかり存在を忘れかけていた神楽が言葉を発した。

「あんだあ？神楽」

「この手紙、意味分かんないアル。銀ちゃん訳してヨ」

そう言って手紙を差し出す神楽。

銀時は手を伸ばして手紙を受け取る。

荒々しく封を破かれた手紙はよく見ると中央に紋章らしきものがあった。

ライオン、熊、鷲(?)、そして蛇。

動物たちの描かれた紋章。

「神楽、中身はこれで全部か？」

銀時が聞く。神楽はコクンと頷いた。

銀時は再び視線を手紙に落とす。

送り主は緑色の文字でこう記されていた

『ホグワーツ魔法魔術学校長 アルバス・ダンブルドア』

聞いたこともない名前。

てか最早この国の人じゃないよね。

だって片仮名だもん。

しかも魔法魔術学校って何？どんな学校？

次から次へとまるで泉のように湧きあがってくる疑問。

いや、もしかしたら手紙に何か説明書みたいなものがあるかも。

そう思って手紙の中に手を入れ、中身を全て出す。

一枚一枚適当に目を通して行く銀時。

だが奇しくも銀時の儚い願いは無残に散ってしまうのだった……。

第5章 手紙の内容が不可解だと怖い

説明書かなんかないのかという銀時の願いは悲しく散ってしまった。

つまり、ないのである。

例えば『ホグワーツ魔法魔術学校』とはなんなのかという疑問を解決してくれるものが。

銀時は一通りざっと確認した後、次の行動に移っていた。

スパアアン!!

手紙をテーブルに叩きつけるという行動に。

その行動を見て新八と神楽がギョツとした目で銀時を見る。

だが銀時にはどうでもいいこと。

「ちょ、何してんですか銀さん!？」

「どうしたアルか? ついに暑さに頭がやられちゃったアルか?」

「わけわかんねーことだらけ! なんなんだホグワーツって!

魔法魔術学校って何!?! ついでに言うなら説明書きくれ誰かアアアア
ア!!--」

「落ち着いてください銀さん！手紙、なんて書いてあったんですか？」

「…見てるわけねーだろ！説明書き探すので必死だったんだからよ！」

「叫ぶなヨマダオ。暑苦しいネ」

神楽の毒舌が銀時の頭を冷やした。

まあ実際冷やしてほしいのは万事屋の中なんだけど。

そんなことは置いといて、息を荒げる銀時に新八はまあまあとなだめた。

「ぱつつあん、俺疲れたから手紙の内容お前が読んで」

新八はやれやれと思いつつ先ほどテーブルに叩きつけられた手紙の中身を取り出した。

「仕方ないですね、じゃあ読みますよ。」

『こんにちは、初めまして万事屋の皆さん。』

私はホグワーツ魔法魔術学校校長 アルバス・ダンブルドアといいます。

今回ふくろう便で貴方がたに手紙を送ったのは依頼を頼みたいからです。

依頼内容は会って直接伝えます。

返事はふくろうに持たせて送ってください。

それでは失礼します。

p . s

こちらの世界では楽しいお菓子がたくさんあります。

どれも美味しくて面白いですよ。

敬具　　アルバス・ダンプルドア

…だそうです、銀さん」

新八は読み終わると顔をあげ、銀時にそう言った。

「銀ちゃん行こうヨ！お菓子いっぱい食べたいアル！」

「お菓子目当て!?!?」

神楽がテンションをあげて言うのにツッコむ新八。

なんともいえないチームプレーである。

「……………」

黙りこむ銀時。

と、次の瞬間。

「意味わかんねーよオオオオオオオオオオ！」

即シャウト。

「なんだよ、一つたりとも理解できねーよ！つか出来るかアアアア
！！」

なんだこつちの世界って！しらねーよ！どんな世界だよ！

しかも重要な依頼内容書いてねーしよオオオオ！

なんかもう怖い！この手紙怖いよ！焼いちゃっていい！？ぱっつあん！」

「おおお落ち着いてください銀さん！

もうこの際ですし、受けちゃいましょうよ、この依頼。

お金ないですし、いいチャンスだとおもいますよ？」

「そつネ！ついでにあっちの世界のお菓子食べたいアルし」

「違うだろ、お前はお菓子が目的で依頼がおまけなんだろ」

銀時のツッコミが入る。

しかしまあぱっつあんの言うことに反論はできない。

考えてみればここ一カ月、依頼のいの字もなかったくらい仕事がなかった。

食費も尽き、まさにピンチとっていい状態。

万事屋には育ち盛りの子供が2人いる。

そんな子供にこれ以上無理はさせられないという思いが銀時のなかにあった。

それを考えると今回の依頼は……。

「はあ…仕方ねえ。

ぱっつあん、手紙の返事、『ご依頼ありがとうございます、喜んで
お受けします』って書いて。

受けんぞ、この依頼」

どんな依頼でもどんと来いやア！と半ば投げやりになる銀時だった
…。

第6章 魔法ってなんでもできんのかね

アルバスなんとかからの手紙が来てから早2週間経過していた。

手紙の返事はしたし、あとはあっちがどう出るかなのだが…。

今の万事屋はそれどころではなかった。

何せ暑いから。

8月末とはいえ、暑いには変わらない。

蒸発するんじゃない？くらいの暑さ。

だから万事屋トリオは頭から手紙のことなんてすっからかんだ。

(懐の金もすっからかん)

新八はソファーに寝そべるように座り、

神楽は扇風機をひたすら追っ。

銀時はやっぱりなんにもせず新八の向かい側に座っていた。

バサササ!

と、その時。

きましたたふくろつ。

全開にしていた窓から侵入。

そしてまたも銀時の顔面にクリティカルヒット！

「ふぶぶおー！」

あれ？デジャブじゃね？これ。

なんて思っ新ぱっつぁんとグラさん。

「…銀さんアンタ…やっぱりおでこにブラックホールあるんじゃないですか」

「ほんとアル。何回目と思ってるアルか」

2人の冷たい声が降りかかる。

今度はちゃんとふくろつを受け止めた銀時は素早くふくろつの嘴から手紙をとった。

「なんだっけ、この手紙。なんか見覚えあるけど」

銀時が新八に聞く。

「忘れたんですか？ホグワーツだかんだかいうところの校長が依頼してきたの」

「んー覚えてるような覚えてないような覚えてるような…どっちだっけ？」

「知りませんよ、僕に聞かないでください」

「銀ちゃんも歳アル。仕方ないヨ新八」

「神楽ちゃん一発殴っていいかな？喧嘩売ってるよね、絶対」

「はいはい、そのくらいにしてくださいよ。アンタらが口喧嘩すると終わりが見えませんよ全く」

「んで？手紙の内容なんなわけ？」

「切り替え早いです銀さん」

「いいから読めヨコノヤロー」

「ちっさい銀さんがいる！てか標準語…ま、いつか」

口で勝てる相手ではないことくらい新八も重々承知しているため、
投げやりになる。

(+ 暑いのもある)

「えーと…んじゃ、手紙の内容読みますね」

そう言っつて中身を取り出す新八。

「おう、早くしろ」

「せかさないでください。」

えー…

こんにちは、万事屋のみなさん。

依頼受けて下さりありがとうございます。

細かいことは現地でお話しますが、これから伝える内容は大切なのでくれぐれもお忘れのないように。

貴方がたはこれから1年間ホグワーツでお過ごしになります。

なので着替えを何枚か持ってきてください。

洗濯はこちらでできますので何枚かです。

それから何か飼っているようでしたら連れてきてもらって構いません。

それがどれだけのサイズでも、こちらには専門の者がいるので迷惑にはなりません。

次にこちらに来る手段ですが、ホグワーツの生徒達と同じようにしてもらいます。

といってもまず貴方がたは国を移動しなければなりません。

そこで私が特殊な魔法を手紙にかけました。

準備ができたならこの手紙の封筒に9月1日の午前10時に墨を垂らしてください。

もちろん、荷物を持った状態で。

そしたら貴方がたは多分キングズ・クロス駅にいると思います。

そこから9と4分の3番線を探し、11時までに赤い汽車に乗ってください。

あとは現地でお話できますので、以上です。

汽車に乗るための切符は手紙に同封してあります。

それではまた後日。

p・s

お金は必要ありません、車内販売では貴方がたのみ無料にするよう頼んでいます。

でも、あまり食べないように。夕食がありますから。

敬具 アルバス・ダンブルドア

…だそうです、銀さん」

長文読み終えた新八はため息をついた。

「長かったアルな」

神樂がしみじみ言う。

「…意味、分かりましたか？」

「全然」

銀時がふくろつを抱えて言った。

「そのふくろつはどつするアルか？」

「んー？そのうち自分で帰るだろ。そんならい賢そつだし、こいつ

銀時がめんどくさそつに答える。

そつですね、と適当な返答の新八。

「なーんかもつシャウトする体力もねーわ。いろいろおかしいし、
シッ」
「ミミどころ満載なんだけれども」

これからどつなるんだか…このめんどくさがり屋め…と不安に思つ
作者であつた。

第6章 魔法ってなんでもできんのかね（後書き）

すみません、展開早くて。

次回はきちんとします。

第7章 旅の前は慎重に行動するべし(前書き)

遅くなりました。

第7章 旅の前は慎重に行動するべし

まあそんなこんなで来ました依頼当日。

え？もつと分かりやすく説明しろ？

では訂正しよう。

依頼当日まで万事屋ではいろいろなことがあったのだ。

いきなり銀時が忘れもの確認をするとか言いだしたり、

神楽が大量に酔こんぶを持って行こうとしたり、

定春が間違っってイチゴ牛乳を飲もうとしたり、

新八の眼鏡が割れそうになって本人の心も割れそうになったりと、とにかくいろいろなことが起こったのだ。

とりあえず定春の件と神楽の件、それから新八の件は未遂に終わった。

(銀時の件はまあ役にたつからという理由で遂行された。)

そして今現在。

万事屋は険しい表情で手紙を睨んでいた。

三人の手には軽いお泊りセット。

歯ブラシや下着、それから3着ほどの着替えなどが入っている。

「…準備はいいか、野郎ども」

銀時が囁く。

「はい！」

「おつネ！」

「ワン！」

上から順に、新八、神楽、定春が返事をした。

銀時はコクリと頷く。

そして手紙の傍に置いてあった墨汁が染みた筆を手に持つ。

「んじや、垂らすぞ……」

そう言ってゆっくりと筆を手紙の上に持っていく銀時。

と、その時。

「あ、ちょっと待ってください」

新八の声が動きを止めた。

「何アルかお前！」

「ガスの元栓閉めていたかどうか見てきます」

「お前はどっかの主婦か！」

だが仕方のないことだろうと銀時は新八を止めはしなかった。

荷物を置いて台所へと向かう新八。

すると、神樂が何かを思い出したようにパツと顔をあげた。

「銀ちゃん、私傘を玄関に置きっぱなしだったアル！取ってくるヨ
！」

「あん？そりゃヤベーな。早く行け」

神楽は荷物を置いてパタパタと玄関に向かって行った。

「あー俺も戸締り確認しに行こうかな…」

「ワン！」

銀時はそう言って筆を置き、荷物を置いて立ちあがった。

襖をあけ、和室に入る銀時。

定春は筆をじゅーっと見つめた。

「元栓閉まってきましたよーって、定春、銀さんと神楽ちゃんは？」

「傘持ってきたアル！って、銀ちゃんいないアル」

「おーわりーわりー。ちよっくら戸締り確認を…」

三人集合。

定春はそれを見計らったのか、次のような行動をとった。

器用に前足を使い、

筆の端っことを思いっきり踏むという行動に。

筆はてこの原理みたいなので空中に高くあがり、

ベチャっ!!

手紙の真上に落ちた。

勿論手紙に墨がつくわけで……。

手紙に付着した墨から眩いばかりの光が溢れだした。

思わず目を閉じる万事屋。

そして物凄い強風が吹き荒れたかと思うと、突然人のざわめきが入ってきた。

アレ?と思うと目を開ける。

と、目に飛び込んできたのは既に万事屋が知らないところだった。

第8章 大抵ふくろつと魔法使いはセットでいる(前書き)

銀さんがあんま登場しません。

子供たちが活躍しますよ！

第8章 大抵ふくろつと魔法使いはセットでいる

無言になる万事屋一行。

そりゃそうだろう。

何せ手ぶらで異国に来てしまったのだから。

これはアレだ。

例えるならドラ エで何も持たずにモンスターのうじゃうじゃいる
フィールドに出るようなものだ。

自殺行為ともいえる行動。

万事屋はまさにその状態であった。

手ぶらのまま見たこともない世界に放り込まれた。

しかも馬鹿デカイ犬を連れているもんだから周りの視線も痛い。

穴があつたらヘッドスライディングで飛び込みたいくらい痛いのだ。

「…銀さん」

初めに声を発したのは新八。

「なんだ」

「なんですかここ。僕らさっきまで万事屋にいませんでしたか」

「俺も思ってるよ、んなこと。さっきまで俺戸締まり確認してた筈だもん」

「ですよ。で、居間に戻ったらいきなり眩しくなって気が付いた

「ら」ここでしたよね」

「確か手紙が光ってたアル」

「てことはですよ？僕の推測だとここって…もしかして…」

「『『キングズクロス』』」

「だよな」

「ですよね」

「アルな」

「ワン！」

あはははは〜と笑う万事屋。

が、直後。

駅全体に銀時の声が響き渡った。

周囲の視線が一気に万事屋に向けられる。

めっちゃ痛い。視線が。

だが銀時はお構いなしだ。

「あははは〜じゃねーよ！なんでだよ！俺ら手ぶらだぞ！旅前なのに手ぶらってお前、あっちゃいけないことだよ！どーしたらいいんですか俺はアアアア！！」

「ぎ、銀さん落ち着いて！取り敢えず黙ってください！周りの視線がめっさ痛いんです！」

「新八、もうありやダメアル。私たちは他人のふりするネ」

一人狂ったように叫ぶ銀時そっちのけで神楽が言う。

「で、でも神楽ちゃん。アレだと多分一人じゃ何もできないよ」

と、銀時のことを心配する台詞を言いつつ神楽のほうへとついていく新八。

「そんなことよりぱっつあん。私たちはこれからどうしたらいいアルか？」

「どうしたらって…あ！そっいえば僕、手紙持ってるよ」

「流石新八！ダメガネでもたまには役にたつアル！」

「それ褒めてんの？けなしてんの？」

「それよりも、手紙アル！何すればいいか書いてある筈ネ！」

「うん。えーと…まずは9と4分の3番線を探そう」

「あるアルか？そんなの」

「駅員さんに聞いてみたほうがいいね」

話が一応まとまったところでいかにも駅員みたいな恰好をしたおっさんに駆け寄る新八。

神楽は定春と一緒に少し離れてその様子を見守る。

「あの、すみません」

「なんだい、坊や。見ない格好をしているが…」

「僕ら、実は江戸から来たんですけど…9と4分の3番線ってどこにありますか？」

「9と4分の3番線？そんなホームはないよ」

そう答えて駅員は新八を変な目で見る。

新八はその目が実に痛々しくて、駅員にお礼を言つと駆け足で神楽のもとに戻つた。

「どうだったアル？」

「それが…9と4分の3番線なんてないって」

「マジでか」

「マジだよ。どうしたらいいんだろっ…」

そう言っつて新八はちらりと時計を見た。

針は10時30分をさしている。

「どうしよう、神楽ちゃん。あと30分しかないよ」

「…新八、アレ、見るアル」

神楽はそう言っつて今見つめているほうへと指をさした。

新八はその先を確かめる。

「あ、あれは…」

神樂が指をさしている方向。

その先にはいかにも目立つ集団があった。

しかもただの集団ではない。

その集団の一人のカートの上に乗っているのは

籠に入ったたふくろうだった。

「か、神楽ちゃん…」

「分かるアルか、ぱっつあん」

「うん」

「ふくろつと言ったら魔法使い。と、いうことはアル…」

「あの人たち、もしかしたら9と4分の3番線を知ってるかもしれないってことでしょ？」

「そうネ！だから奴らをつけるアル。新八は銀ちゃん呼んでくるアル」

「了解です…！」

なんとなくかなりそつな予感である。

第8章 大抵ふくろつと魔法使いはセットでいる(後書き)

ちなみに。

手ぶらと本編ではありましたが、それぞれ持ち物はあります。

銀さん 木刀、財布

新八 依頼の手紙、眼鏡

神楽 番傘、酢昆布

多分この程度所持してます、彼らは。

これからこれで押し通していきますんで。

第9章 魔法界の入口に常識なんて通用しない（前書き）

今回異常に長いです。

ご了承ください。

第9章 魔法界の入口に常識なんて通用しない

「銀さん!!」

新八はそう言って今だ頭を抱える銀時に駆け寄った。

銀時は新八のほうを向く。

「なんだアダメガネ!!用がねーなら呼ぶな!」

「ダメガネいうなアア!!それにまだ用件言っていないでしょーが!」

「じゃあなんだよ」

「アンタがギヤーギヤー叫んでる間に僕らでホグワーツ行き
の汽車探してたんですよ」

「ギヤーギヤーってなんだコラ。それじゃ俺が馬鹿みてー
じゃねーか」

「まさに馬鹿そのものでしたよ。さっき叫んでたアンタは」

まあ見事に言葉を返す新八。

銀時は密かに心の中でコイツキャラ変わってね？みたい
に思う。

「そんで？汽車は見つかったのかよ」

銀時が話を元に戻す。

「いえ、汽車自体はまだ見つけてませんが、その汽車が何処にあるのかは分かりかけてます」

「んだそりゃ。分かりかけてるってどーゆー意味だよ」

「それが、汽車のあるホームなんてここにはないってさっき駅員さんに言われたんですよ。で、どうしようか神楽ちゃんどうしようか悩んでたら丁度アレらしい集団見つけまして…」

「アレらしい集団？」

「魔法使いみたいな集団です。全員赤毛で、一人がふくろうの入った籠を持ってたんですよ。それで多分魔法使いの集団なんだろうなと予想したんです。で、僕の考えだともし魔法使いの集団ならホグワーツ行きの汽車がどこにあるのか知ってると思って…」

「ほぐなかなかな考えじゃねーか。そーいや、神楽と定春はどうした？」

「今更ですかアンタ…。神楽ちゃんと定春はその集団のあとをつけてます」

「いいのか？あいつにんなことさせて。あーゆーのめっちゃノリノリするだろ、アイツは」

「大丈夫でしょ、多分」

「んじゃ、俺たちも神楽を探そうぜ。定春もセットだし、すぐ見つかる」

「ですね」

いい感じに話がまとまり、銀時と新八は神楽と定春を探す為に動いた。

その頃神楽はあの赤毛の集団の後をつけていた。

と、赤毛の集団が立ち止った。

何事かとつま先で立ちながら様子確かめる。

どうやら赤毛の集団の一人、太ったおばさんに少年が話しかけたようだ。

神楽は一瞬、その少年を新八と見間違えた。

だってその少年は黒髪に眼鏡をかけていたのだから。

だがよく見ると身長が低いし、目の色が緑色なのだ。

少年はどこか困ったようにおばさんに話しかけている。

おばさんはしばらく少年の話を聞いていると、すぐに笑顔になり、向こうにあるレンガの柱を指差した。

そしてその集団はレンガの前に集合する。

何が始まるのだろうか、神楽はその様子を見届ける。

「あ、いたいた」

と、聞き慣れた声が神楽の目を逸らさせた。

振り返ると見慣れた銀髪頭と眼鏡。

「銀ちゃん、新八！」

「どう？神楽ちゃん。あの集団、なんか動きあった？」

「眼鏡かけた少年があの集団に話しかけてたアル」

「新八ならここにいるぞ？」

「新八じゃないネ。ちっさかったし、目が緑だったアル」

「てか何分かり切ったボケかましてんですかアンタ」

「いいじゃねーか別に。それより、集団はいいのか？汽車がどっこにあんのか分かんねーだろ」

「あ、そうだったアル」

「どっこにいるの？その集団は」

「あっちアル」

そう言って人混みの向こう側を指差す神楽。

新八と銀時はその指の向いているほうへ歩き出した。

神楽と定春もあとをついていく。

「あ、あれですよ、銀さん」

目立つ赤毛を見て言う新八。

三人＋一匹はそれを見てどンドン歩を進める。

と、新八と神楽は仰天した。

確かに目標の赤毛の集団には近づけた。

が、明らかにおかしいのだ。

何故かって？

だって少ないのだ。

人数が。

さっき見たのは確かに5人以上だった筈。

なのに今見えている赤毛は三人程度なのだ。

「新八。人数が減ってるアル」

「うん、それ僕も思ってるよ」

「ん？どした？なんかあったのか？」

一人状況が飲み込めない銀時が2人に聞く。

新八は銀時になんてか理由を教えようと目を逸らしかけた。

が、逸らせなかった。

またも仰天するようなことが起こったから。

今度は銀時も仰天した。

赤毛の一人がレンガでできた柱に向かったかと思うと

吸い込まれるように消えたのだ。

ぶつかると思ったのにぶつからず、消えた。

アンビリーバボーだ。

「え？どーなってんの？今、何が起こったの？」

銀時が唾然呆然しながら聞く。

「知りません。てか分かりません。消えましたよ。人が」

「消えたっつーか吸い込まれたネ。柱に向かったと思ったらいつの間にかいなくなったアル」

そう答える新八と神楽。

「…新八。もう無理。あのおばさんに今どうなったのか聞いてこい」

「そうですね、僕もいい加減対応しきれなくなってきました」

「ほんとアル。魔法使いつて常識が通用しないのがほんと身に染みたネ」

新八はふらりと赤毛のおばさんに歩み寄った。

「すみません」

「はい？」

新八が呼びかけると、おばさんは笑顔で振り向いた。

「あの、つかぬことお伺いしますが、ホグワーツ行きのお車ってどこにあるか知ってますか？」

「ああ、あなたも入学者なの？それにしちゃ大きいわね……」

「いえ…僕は別件でホグワーツに行くんです」

「あらそうなの？じゃあ説明するわね。あの柱があるでしょ？」

そう言っておばさんは例の柱を指差す。

「ああ…あの人が消える柱ですか」

「人が消える？いいえ、あれは9と4分の3番線への入口よ」

おばさんはくすくすと笑いながら言う。

「入口ですか…そうですか…入口…って、ええええええ！？い、入口！？あれがですか！？あんな堅そうな入口初めて見ましたよ！！」

おばさんの言葉を聞いて芸人ばりばりのリアクションをとる新八。

「大丈夫よ。あの柱に向かって走るとホームにつくから」

「は、はあ…」

新八はそのおばさんにお礼を言つと、急いで銀時たちの元へと戻つた。

「銀さん、どつちやらあの柱に向かって走るとホームにつくそうです」

「…え？マジでか」

「マジです。僕も信じたくないけど」

「…銀ちゃん。魔法界ってほんっと常識ないアルな」

神楽の言葉がつくづく銀時を納得させたのであった。

第10章 勇気と思い込みは紙一重

「…んじゃ、誰が一番に行くか決めるぞ」

銀時が険しい顔で言った。

新八と神楽がその言葉に頷く。

「あ、あと言っとくけど定春と神楽はセットだからな」

「どーゆー意味ですか？」

「まあ詳しく話すともんどいから、簡潔に述べるぞー。あれだよ新八。神楽と定春は一緒にいるイメージがあんだろ？だからだよ」

「ほんと簡潔ですね。分かりやすいからいいですけど…」

「それより銀ちゃん。誰が一番にあの堅そうな柱に突っ込むアルか？」

珍しく神楽が話の流れを元に戻す。

「そーだなー…話し合うのとか面倒くさいからジャンケンにする」

「ジャンケンアルな…やる気がふつふつと湧いてきたネ！」

そう言っつて拳を握る神楽。

「いやいやいや、神楽ちゃんそれ別の意味で殺る気でしょ!?!?」

「何言ってるアルか？私もう殺る気満々アル！」

「銀さんジャンケンやめましようよ！今に大惨事が起こりますって絶対」

「んだよ、少々大丈夫だろ。もしなんかあったらあの柱に突っ込みやなかったことになるだろ。あの柱異世界への入口みたいなもんだから」

「言ってることがめっちゃくちゃですよアンタ！」

なんてうだうだ言いつつ時計を見る新八。

時計は10時55分になっていた。

「ぎ、銀さん！もうあと5分しかありませんよ！」

慌てて報告。

銀時もそれを見てビックリ仰天する。

「オイオイオイオイ、やべーんじゃねーの？よく分かんないけど」

「十分ヤバいですよ！もう順番とかどうでもいいですから、この際定春に全員乗って柱に突っ込みましょう！」

新八が言う。

しかしここでもすんなり受け入れない奴が一名。

「やーヨ！それでもし柱にぶつかったら定春大怪我するネ！私絶対そんなことさせられないアル！」

「もういいから、大丈夫だから！思いこめ！定春はぶつかんないって！あのーあれだ、勇気持て！」

銀時が必死に説得してみる。

だが神楽は引き下がらない。

「そんな思い込みでなんとかなったら世の中不景気になってなんねーんだヨ、マダオが！」

「思い込みじゃねえ、勇気持てつつつてんだろーがクソガキ！！！」

「絶対定春に危険なことなんてさせないアル！」

ヒートアップしていく口喧嘩。

そろそろ取っ組み合いが始まるだろうと予想した新八は2人を止めようと動いた。

が、途中でふと思い出す手紙の内容。

おいしいお菓子がある…。

そう手紙には記されていないなかったであろうか。

そしてペカーツと光る新八の眼鏡…じゃなくて思いつきの豆電球。

「神楽ちゃん神楽ちゃん」

「ああん!？」

気が立っている為か、かなり荒くなっている。態度が。

「今忙しいんだヨダメガネ!邪魔すつと眼鏡割るぞコルア!!!」

なんとも痛いところを突く神楽。

だが新八はめげない。

「神楽ちゃん、魔法の世界って確かおいしいお菓子がなかったっけ」

その言葉にピクツと反応する神楽。

分かりやすいものだ。

新八は言葉を続ける。

「面白くておいしいお菓子…：だけどあつちの世界にしかないんだよねー」

「銀ちゃん、定春に乗るアル！早速出発進行ネ！」

「は？」

あまりの変貌ぶりに変な声を出す銀時。

新八がこっそり耳打ちする。

「銀さん、さつさと乗ってください。せっかく僕が御膳立てしたんですから」

「…新八、お前ダメガネの割には賢いんだな」

「さつきからなんなんですかアンタら。だから褒めてんですか、けなしてんですかそれは」

まあそれはそれだよ、と言って定春に跨る銀時。

神楽もその後ろにさつと飛び乗る。

そして新八も……乗ろうとした。

が、拒否られました。神楽に。

「何乗ろうとしてんだヨコラ。お前は後ろからついて来いヨ。少女の腰掴むなんてどうかしてるアル」

「えええええ！？酷くない！？」

「まあまあ落ち着け神楽。あいつは今思春期まっさかりなんだよ。いうなれば発情期？みたいなの。だから近づいたらダメだからな」

「アンタそれフォローしてないでしょ！何関係ギクシャクしそうな嘘を教えるんですか！！」

「うわ、最低アル。暫く私に近づかないで」

「酷っ！！もうこれいじめじゃない！？」

「冗談だよぱっつあん。ほら、俺の後ろ乗れ。それでいいだろ？神楽」

「んーまあ今回は許してやるヨ」

まあそういうわけでなんとか定春に乗れた新八。

それを合図に定春はのっしのっしと柱に向かって小走りし始めた。

だんだんと近づいてくる明らかに堅そうな柱…。

三人は目を力の限りきゅっと閉じた。

ぶつかる……。

だがいつまでたっても衝撃が来ない。

三人は目を開けた。

そこは人でにぎわう赤い汽車の止まったホームだった。

第10章 勇気と思い込みは紙一重（後書き）

今回新八の扱いひどかったですね。

新八ファンの皆様、すいませんでした！

第11章 汽車だって普通じゃないよね(前書き)

これからは短めで更新していきます。

第11章 汽車だって普通じゃないよね

抜けられた。あの堅い柱から。

頭がついていけず固まる万事屋。

流石魔法の世界。

なんでもできるんだと改めて実感する。

と、いきなり銀時は後ろから声をかけられた。

振り返るとそこにはあの赤毛のおばさん。

やっぱり満面の笑みである。

「貴方達、早く汽車に乗らないと置いていかれるわよ?」

「あ、そーだった」

「本当おかしな人たちね。あ、その大きな魔法生物、貴方達のペ
ットかしら?」

「魔法生物?何アルか?それ」

「神楽、話をややこしくすんな。んなのあっちで聞きゃいいだろ」

「あの、ペットってどついたらいいんですか?」

「それなら汽車の後ろへんに駅員さんがいるから預けるといいわよ」

「あ、ありがとうございます。だそうですよ、銀さん、神楽ちゃん。とにかく早くしないと僕らマジで乗り遅れちゃいますよ」

「だな。あんがとよ、おばさん」

「じゃーなー」

そう言っつて赤毛のおばさんと別れる銀時達。

急いで汽車の後ろ側へと移動する。

たいへん人が混雑しており、なかなか前に進めない。

なんとか頑張る万事屋一行。

そして遂に後ろまで到着できた。

しかし時間はもう少ない。

大急ぎで駅員に事情を話す新八。

何故新八なのかはお分かりだろう。

銀時や神楽が口を開くとかならず面倒くさいことになる。

無駄に話をややこしくする可能性大だ。

駅員は案外簡単に話を呑み込んでくれた。

多分あの依頼主のおかげだろうと思う新八。

だが、そう考える余裕もなかったことに気付く。

時計は10時59分を示していた。

慌てて汽車に乗り込む入口を探す万事屋。

そして大慌てで入口にダイブした。

走り回ったとはいえ、短距離だった為息はあがっていない。

が、疲れた。

こんなんがホグワーツにいたら日常茶飯事なのだろうか…なんて
考えたくもない。

第12章 1度あるってことは2度目もあると思え

銀時達がスライディングで乗り込んだのとほぼ同時に汽車は動き始めた。

「な、なんとか乗れたみてーだな」

銀時が膝やらについた埃をはたきつつ言う。

「みたいですね」

新八も同意。

「ねえ銀ちゃん、定春はこの汽車に乗れたアルか？」

「あー？大丈夫なんじゃねーの？駅員さんだってあんなに余裕な笑み浮かべてたし」

「その余裕な笑みが逆に怖いアル！どっかに捨てちまえばいいだろう的な、そんなこと奴が考えてたらどうするアルか！？」

「流石にそれは考えすぎでしょ神楽ちゃん」

「フーかさ、いい加減移動しねーか？こんな狭いところで言いあってもなんにもなんねーだろ」

…まさしく銀時の言うとおりである。

さっきから当たり前のように会話をしていた三人だが、今居る場所は正直言うところ狭い。

三人が同じ場所にいるからだろうが、まあとりあえず狭いのだ。

神楽と新八も薄々感じてはいた。

「…どこか座れるところ探しましょうか」

新八が言った。

「だな。いつまでもここにはいれねーし」

「ついでにお菓子も食いたいしな」

真顔で言う神楽。

「そーゆーことは忘れないんだね…」

そう呟くと、万事屋一行は狭い汽車の入口から移動した。

「んーどこもいっぱいアルなー」

神樂はそう言った。

万事屋は今、どこか座れるところがないかうつろつろと汽車の中をうろついていた。

だがどこもかしこも4人以上座っていて相席すらできない。

ハア…とため息をつく銀時。

「まったく…なんでこうも人が多いんだ？そんなにデカイ学校なのかねエ」

「よく分かりませんが、多分かなりの数だと思いますよ。あのホームだってすごい人がいましたし」

「んだヨチキシヨー。私の座れる席がないネ。この際何人か窓から突き落として席を確保するしか手はないんじゃないアルか？」

「何さりげに恐ろしいこと言ってるの神楽ちゃん！ダメだからね、そんなことしちゃ！」

「いい考えだな神楽。よし、早速実行してみるか」

「っておしいイイイ！アンタまで同意したらおしまいじゃねーか
アアアア！！」

「だーいじょうぶだってぱっつぁん。ばれないようにすっから」

「まずアンタの頭ん中の常識が大丈夫ですか！？警察沙汰になりそ
うなこと仕出かさないください！マジで頼みますから！」

「じゃあとりあえず目に付いた奴処理な」

「おうネ！直感ってやつアルな！」

「聞けエエエエ！！」

新八のことを盛大にスルーしてずんずん進む危ない2人組。

ああ、あの二人が出動したらマジで死人が出るかもしれない…！

と、あの2人が足を止めた。

そしてやけに厭らしい笑みで新八の方を見る。

「何を企んでるんですか」

「相席する場所見つけたアル！」

「はあ？」

聞き返す新八。

てかもう相席決定かよ。

「いいからこつち来いよ新八」

そう言っ手招きをする銀時に、新八は取り敢えず近づいてみる。

「あ、あの人…」

と、コンパニオンを覗き込んだ新八は呟いた。

コンパニオンの中に居たのはさっき赤毛のおばさんに話しかけていたあの眼鏡の少年だ。

どうやら誰かと会話をしているようだ。

身を乗り出して相手の人物を確認しようと努力してみる。

が、滑ってしまった。

ネタが？ではない。

足が、である。

新八は銀時にすがつた。

支えてくれるであろうと思ひ、全体重をかけたのだが…。

大きな誤りであった。

銀時はそのまま新八とともにこけた。

しかもコンパニオンのドアを破壊して。

神楽はその状況を冷たい、絶対零度な目で見つめていた…。

第13章 自己紹介はどこでも必要不可欠(前編)(前書き)

久々の投稿!

お待たせ(?)しました。

第13章 自己紹介はどこでも必要不可欠(前編)

「ってエ…いきなりなんだってんだ？」

銀時が新八の下敷きになったまま言った。

「す、すみません銀さん…」

新八が慌てて銀時の上から退く。

「…あの、大丈夫ですか？」

と、銀時が立ち上がろうとした時、誰かが話しかけた。

見るとあの眼鏡の少年。

わざわざ銀時の方へとやってきて言ったらしい。

「大丈夫大丈夫。こけただけだから」

銀時が立ち上がった言う。

「そうですね」

少年はそう言つと座席へと戻っていった。

「何してるアルか2人とも」

「だっていきなり新八が体重かけてくつから…」

「銀さんなら倒れないと思ったんですけど」

「…銀ちゃんそんなに力弱かったアルか？」

神楽がいぶかしげな目で銀時を見る。

「誰だつてこけるもんだろ、いきなりだったら」

苦し紛れの言い訳…。

神楽と新八は思つ。

「それより、そこのお二人さんは魔法使いなのか？」

と、銀時が素早く話題を切り替えた。

多分、新八と神楽の視線に気付いたからだろう。

赤毛の少年と眼鏡の少年はきょとんとした。

それからハッとなって慌てて答える。

「この汽車に乗ってる人はほとんど魔法使いだよ」

赤毛の少年が答えた。

「あ、僕ロン。ロンウィーズリーっていうんだ」

自己紹介もついで。

「僕はハリーポッター」

眼鏡の少年も続いて言った。

この流れだと万事屋も言わなきゃならなくなる。

「いけ、ぱつつあん」

「って僕ですか!？」

「ここは第一印象が大事ネ!お前は地味だから一番初めに言っといた方がいいアル」

銀時と神楽が耳打ちをする。

それさりげなく酷くない?なんて心の中でツッコむ新八。

だが2人の言っている言葉も嘘ではないため反論できない。

思い切って、半ば投げやりにやってやるうと決心した新八であった。

第14章 自己紹介はどこでも必要不可欠(後編)(前書き)

お久しぶりでござーます!!

どんだけ更新していなかったんだらう。

とりあえず謝ります。

ごめんなさい!!

第14章 自己紹介はどこでも必要不可欠（後編）

「あ、え、と…僕は志村新八です」

新八がなるべく笑顔（というよりはひきつった顔）で言った。

が、後ろの2人が許すはずもなく。

「「地味」」

声をそろえてそう言った。

正直めちゃくちゃ息あってる。

「地味ってなんだこらア！！なんでそこだけ奇跡的に息ぴったりな

「んだよー!」

きちんとツツコむ新八。

「しょうがないネ。本当のことなんだから」

神楽が言った。

それに新八はう、と凶星を突かれたような声を発する。

新八の背中に槍らしきものが刺さったような幻覚が見える気がしてならないハリーとロン。

「名前だけじゃ印象に残んねーだろーが。あの一言にさらに“自分のことはダメガネと呼んでください”みたいなそーゆー鮮明に記憶に残るようなこと付け足したらよかったのに」

銀時が新八の声を真似る。

しかしその言葉には勿論ツツコみどころもあるわけで。

「なんだダメガネって!! 例えが酷すぎますよ!! ある意味残りま
すから!」

「残りやいいんだよ残れば」

「そーゆー問題じゃないでしょ!!」

グダグダ漫才のゴング、今鳴りました。

銀時があー言えば新八がこーツツコむ。

神楽は隅のほうで溜め息をついた。

アレ? ていうか自分溜め息つくキャラだったっけ? なんて心の中で
疑問符を浮かべつつ。

「こんな狭いところで騒がしいアル。おい、赤毛。相席してもいい
アルか?」

神楽が傘で座席を指す。

いやそんな危ないもの人に向かって指しちゃ駄目だろ、なんてツッコまれそうだが生憎ツッコみ役であるぱっつあんが銀時と口論中の為、あえてナレーターがツッコみます。

「別にいいけど…その2人は放置してていいの？」

ロンが聞いた。

ロンくん、そこはまず赤毛って呼ばれたところをツッコもつよ。

赤毛でいいのか君は。

「いいネ。どうせもつすぐ何かしらの理由で入ってくるから」

そう言いながら神楽は何処に座ろうかきよるきよるした。

その視線に気付いたハリーは急いで立ち上がる。

「よかつたらここに座りなよ。僕ロンの隣に座るから」

「マジアルか。じゃあ遠慮なくそうさせてもらうネ」

ハリーはロンの隣に座り、神楽はその2人の向かい側に座った。

「そついえば、君の名前はなんて言つんだい？」

ロンが聞く。

「私アルか？私は神楽ネ！！工場長と呼ぶヨロシ！」

「JJ…工場長？」

「それより女王様のほうがいいんじゃないの?」

ハリーとロンが言う。

だが神楽は胸を張り、こう言った。

「女王様なんかより工場長の方が生産的だから偉いアル! 痩せこけた工場長とお呼び!」

「なるほど」

「ハリーそこ納得するところ?」

なんか聞いたことのある台詞を吐く神楽に納得したハリー。

ロンはちゃっかりツツ「んだ。

「ちなみにあそこの白髪のクルツクル天然パーマは銀ちゃんネ！本名は…忘れたアル」

神楽がいまだ言いあいを繰り返している銀時と新八のほうをちらりと見て言った。

「本名忘れたの？」

ロンが聞く。

それに神楽はうん、と頷いた。

「銀ちゃん銀ちゃん言い過ぎて、本名なんだったのか忘れちゃったアル。まあ本名なくても生きていけるネ」

「そういう問題！？」

ロンがツッコむ。

「…あとで本人にちゃんと聞こう」

ハリーはなんとというか一人でそんなことを考えながら窓の外を眺めていた。

第14章 自己紹介はどこでも必要不可欠(後編)(後書き)

ロンがいつの間にかやらツッコみ担当に…。
いいんだろつか、これで。

そしてこれを読んでくれる人は果たしているのだろうか。
後書きだけ。

第15章

魔法界のお菓子に凄い！いろんな意味で

それからなんとか新八と銀時の言い合いも終わり、銀時の本名も聞き出せたハリーとロンはコンパニオンできゃいきゃいと話をしていた。

と、突然コンパニオンの扉が開き、にこやかなおばさんがやってきた。

「車内販売よ。何か欲しいものあるかしら？」

おばさんはそう言って引いていたお菓子山積みのカートを銀時達に見せた。

おお〜と声をあげる銀時達万事屋。

ハリーも声はあげながったが目を輝かせていた。

「じゃあ僕そこにあるお菓子一個ずつ全部ください！」

ハリーはそう言つとポケットから金貨を出し、それをおばさんに差し出した。

万事屋三人は驚きに目を丸くする。

おばさんも目を丸くしたがすぐに笑顔に戻り、どうぞ、と言った。

おばさんはそれから銀時達をちらりと見た。

「ああ、あなたたちもしかして万事屋、とかの方たち？」

「え？いやそうだけど…」

銀時が答える。

「やっぱりそうなのね！ダンブルドア校長の知らせて聞いてるわ。
この世界のお菓子、食べた事ないのよね？良かったらどうぞ好き
なのとって頂戴」

おばさんはそう言ってカートを差し出した。

途端に神楽が反応する。

「神楽ちゃん、取り過ぎないようにね」

新八が一応指摘。

それに神楽が分かったアル！と返事をした。

だが…。

「えーと…これとあれとそれと…」

呟きつつとるお菓子の量はハリーと同じくらいの量。

ぱっと銀時が立ち上がった。

「やっぱり俺が選ぶ！お前に任せてたら車内販売出来なくなるから！」

「何アルか銀ちゃん？全て私に任せとくといいいネ！」

「任せてどうなるか分かってるから言ってるんだろ！」

結局、神楽は銀時に珍しく押されてしまい、お菓子を選ぶ権利を譲ってしまった。

「なんだヨこんちくしょー。私だって食べたいのにー」

などなど、ぶつくさ言いながら新八の隣に座る神楽。

銀時は何か唸りながらお菓子チヨイス中。

銀時が悩みに悩んだ結果、持ってきたお菓子は10種類程。

「さて…と。何から食おうかな…」

そう言っって神楽と新八の間に座る銀時。

向かい側のハリーは一つの箱を開けようとしていた。

「ハリー、それなんだ？」

銀時が聞く。

ハリーはその言葉に顔をあげた。

「ああ、これですか？これは…蛙チョコ…らしいですよ」

「チョコ！？よっし、俺もそれ食おう！」

銀時がお菓子の中からガサガサと蛙チョコを探す。

と、ロンがあ、という声をあげた。

「2人ともその蛙チョコ食べるのはいいけど、注意しなよ。何せそのチョコ普通じゃないから…」

「え？」

2人が声をそろえて聞き返した。

同時に箱もオープン。

遅かったですね。

箱の中から突如飛び出た物体。

うわあ！！と声を上げた新八。

見ればそいつはチョコ色の蛙。

目を丸くするハリーと銀時。

「ああ…だから言ったのに。蛙チョコは動くから食べにくって言う
おうとしたんだけど…」

ロンが溜め息をつく。

結局蛙二匹は開いていた窓から飛んで行ってしまった。

残念がる銀時。

「あのなあ…そーゆーことは早く言おうか…」

銀時の沈んだ声。

「言おうとしたら開けたんだろ…」

ロンが言う。

「アレ？ロン、このカード何？」

と、ハリーが箱に入ってたらしいカードを取り出す。

「…アルバスダンプルドア…って、この人がダンプルドアなんだ！」

ハリーが声をあげた。

その名前に銀時達も反応する。

「ダンプルドア…ついたら俺たちの依頼主じゃねーか」

「ええ。で、ハリー。それがどうしたの？」

「ほらこれ。ダンプルドアの写真…オプションで動いてる」

そう言ってカードを銀時達に見せるハリー。

顔が驚きを表している気がする。

「…写真…動くもんだっ たっ け？」

銀時の顔も途端にありえないという表情になる。

「いえ、動かない筈です。僕の記憶が正しければ」

新八も言う。

「世の中すごいアル」

最後の一言が神楽。

銀時達の視線の先には手を振る半月眼鏡かけた白ひげ爺さん。

「え？動くのが普通じゃないの？」

ロンが言った。

えー！ー！ー！…みたいな空気がコンパニオンに漂った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6778s/>

ハリー・ポッターと銀色の侍達

2011年6月26日10時59分発行